

柳城学院・創立記念礼拝式辞（2021.11.02）

先月の10月12日、チャプレンの下原先生と相原先生、宗教委員会の先生や職員の方々といっしょに八事にある創設者マーガレット・ヤング先生のお墓参りをし、ともにお祈りの時をもちました。ヤング先生が眠っておられるところを囲むようにしながら、わたしたちの足元を支え、また、わたしたちを導いてこられたヤング先生からの語りかけに耳を傾ける、そのような時をもちました。イエスは、「わたしは道であり真理でありいのちである」と言われました。ヤング先生の墓碑にもその同じ聖書の言葉が刻まれています。まさしくヤング先生は、わたしたちにとっての歩むべき道であり、力や励ましを与えてくれるいのちの源でもあります。

ところで、創設者のヤング先生のお墓は、なぜ名古屋にあるのでしょうか。ヤング先生は1898年に柳城を創設してから20年間あまり日本で過ごしましたが、そのあとは2代目校長のポーマン先生に任せてふるさとのカナダに戻りました。60歳代半ばのことでした。ある一定の期間の働きを終えて祖国に戻るということは宣教師としてはめずらしいことではありませんでした。

しかし最晩年になって、ヤング先生は日本にふたたび行くことを思い立つのです。その事情について、ヤング先生がなくなった直後に、カナダで発行されたある教会の機関誌のなかで、当時の柳城の校長であったポーマン先生は次のように記しています。

「82歳の晩年のマーガレット・ヤング先生が11月に（カナダの）親戚と友だちに最後の別れを告げ、名古屋のかつての友だちとともに、また、彼女が、その幼児の時から育て教育してきた養子の清水正高さんの家で、その最後の日々を過ごそうとして、日本に向けて船の旅に出られたことを皆さんの多くはご存知ないでしょう」と記しています。日本への船旅は高齢のヤング先生にとってどれほど大きな負担となったことでしょうか。ポーマン先生は続けて記しています。「ヤング先生はバンクーバーを出発すると、ご高齢のため体が弱られ、乗船している間ずっと床についていなくてはなりませんでした。じっさいその弱り方は大変なもので、意識のない状態が続き、船長は海での葬儀の準備をしたほどでした。」

不屈の精神力で何とかいのちはもちこたえ横浜港に到着しましたが、話すことができなほどに衰弱していたので、救急車でそのまま聖ルカ病院に搬送されました。しかし体が少し回復すると、ヤング先生の気持ちがある名古屋へと向かうことになりました。

名古屋の地では、多くの養成校の教え子たちや、ヤング先生に教わった幼稚園の園児たちやその保護者たちが毎日のようにヤング先生のところを会いに集まってきました。その後もヤング先生の容体が十分に回復することはなく、逝去へとつながっていくものではありましたが、これらの名古屋での日々は、ヤング先生にとってはとても幸せな時であったように思われます。

ひとは自らの死期が近づくと、自分のそれまでの人生の中でもっとも記憶に残っているところへふたたび訪れたいと、と言いますが、ヤング先生にとっては、それがまさしく名古屋でありました。しかもこの訪問は、単に訪れると言うにはあまりにも過酷な訪問でありました。それはまさしく死を賭して行った訪問であり、ここには、死に至るまで自ら

の信念のうちに生き続けようとされたヤング先生の生き様そのものが現われているようにも感じられます。

＊

柳城学院に連なるわたしたちは、このような生き方をされたヤング先生が、創設者としておられることを、深く心に刻みたいと思います。ヤング先生が名古屋の地で眠っておられることは、単に、昔の創設者がたまたま日本の地で眠っているということではありません。それは、後世に対する並々ならぬ思いをいだきながら名古屋にたどり着いた創設者が、今もわたしたちのすぐ近くにおられるということであります。その人がおられるところ、それはその人の愛が働くところであります。

わたしたちは、柳城学院が創設されてから123年経過した21世紀という世界の中で生きいますし、二人の生徒からスタートした養成校も、今では9000人以上の卒業生が輩出されていますし、養成校は、短期大学だけでなく、四年制大学もスタートしております。しかしそれでも、その当時と同様に、変わることなく幼児教育の道を歩き続けています。

創設者が、今のわたしたちの歩みを、ほんとうのいみで、すぐ近くで見守ってくださっていることを大きな励みとしながら、これからの日々の歩みを続けていくことを心から願うものであります。